

47. 心筋 ^{201}Tl シンチグラフィで発見された悪性胸腺腫の 2 症例

横川 晃治 板金 広 柳 志郎
 秋岡 要 武田 忠直 (大阪市大・一内)
 溝口 精二 (同・二外)
 波多 信 望月 得郎 越智 宏暢
 小野山靖人 (同・放)
 松本 茂一 日高 忠治 中井 俊夫
 (日生病院・放)

^{201}Tl は心筋イメージング製剤として日常臨床に広く用いられている。今回、われわれは心疾患のため入院した患者で、 ^{201}Tl 心筋シンチにて縦隔に異常集積を認め手術の結果、悪性胸腺腫と診断された症例を経験したので報告する。症例 1 は虚血性心疾患の患者で PTCA の効果判定のための負荷心筋シンチ施行時、前縦隔に異常集積を認めた。 ^{67}Ga シンチにても同部位に異常集積を認め、胸部 CT でも腫瘍像がみられた。手術の結果は mixed cell type の悪性胸腺腫であった。症例 2 は大量の心嚢液貯留のため入院となった。胸部 X 線 CT で前縦隔に内部に石灰化を伴う腫瘍像がみられ、 ^{201}Tl 心筋シンチでも同部位に異常集積を認めたが、 ^{67}Ga シンチでは集積はみられなかった。胸部 X 線 CT からは奇形腫も疑われたが手術の結果は epithelial cell predominant type の悪性胸腺腫であった。

呈示した 2 例は、いずれも胸部単純写真では縦隔腫瘍の診断は困難であり、非侵襲的検査としての核医学的手法は非常に有用であった。 ^{67}Ga と比べて胸腺腫に対する ^{201}Tl の診断率は高いといわれ、また ^{201}Tl は静注後早期に撮像することが可能でありエネルギーも適当で、骨への集積もないことから鮮明なイメージが得られ画像診断上有利である。しかし腫瘍に対する ^{201}Tl の集積機序は明らかでなく、今後 ^{201}Tl の胸腺腫に対する診断率、良悪性および組織型との関係、集積の機序についてさらに検討が必要であると思われる。

48. 肺癌および炎症性肺疾患における ^{123}I -IMP と ^{67}Ga の集積パターンの比較検討

末松 徹 檜林 勇 高田 佳木
 大林加代子 加納 恭子 坂本 武茂
 込山 豊蔵 吉野 朗 木村 修治
 (兵庫成人病セ・放)
 坪田 紀明 八田 健 柳川 昌弘
 吉村 雅裕 (同・胸外)
 加堂 哲治 山本 裕之 (同・呼内)

肺癌および炎症性肺疾患について、 ^{123}I -IMP 肺シンチグラフィ delayed 像 (以下 IMP 像と略す) と ^{67}Ga シンチグラム (以下ガリウム像) を対比し、集積パターンの相違について検討した。対象は原発性肺癌 25 例、転移性肺癌 2 例、間質性肺炎 2 例、びまん性汎細気管支炎 1 例、肺炎 1 例および肺化膿症 1 例である。IMP 像は座位で IMP 3 mCi を静注し、24 時間後に撮像した。ガリウム像は、ガリウム 3 mCi 静注後 72 時間に撮像した。肺癌においては、IMP 像では腫瘍周辺部の肺組織に集積増加を認めたのに対し、ガリウム像では腫瘍に一致する集積増加がみられた。IMP 像では肺癌の二次性変化として無気肺を伴っていた 5 例全例で同部に集積増加を認めたが、ガリウム像では集積増加例はなかった。IMP は無気肺の描出に非常に鋭敏な薬剤であると考えた。活動性のびまん炎症においては、ガリウム像では X 線像上の陰影濃度にはほぼ比例する集積増加がみられたが、IMP 像では異常の範囲は明確にできるものの、病巣内の RI 分布は比較的均一であった。

49. 肺小細胞癌における ^{67}Ga シンチグラフィの検討

加納 恭子 檜林 勇 高田 佳木
 大林加代子 平田 勇三 末松 徹
 押谷 高志 久島 健之 岡田佳代子
 坂本 武茂 込山 豊蔵 吉野 朗
 木村 修治 (兵庫成人病セ・放)

肺小細胞癌 40 例 (男性 35 例、女性 5 例、46 から 80 歳、平均年齢 64.7) の ^{67}Ga シンチグラフィを検討した。TNM の示現度は、T 因子は T₁ 1/3, T₂ 10/10, T₃ 20/21, T₄ 5/6, N 因子は N₀ 1/2, N₁ 0/2, N₂ 10/24, N₃ 10/12, M 因子は骨 5/10, 肝 5/6, 副腎 1/4, 肺 1/2, 脳 0/2,